



ポーソホフ振付『RAKU』でのヤンヤン・タン Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

サンフランシスコ・バレエ in ロンドン

同団のロンドン公演は短期間ながら3つのプログラムを揃え、成功を収めました。その最後のプログラムについて、デボラ・ワイスがレポートします。

サドラーズ・ウェルズ劇場での成功の背景にあったのは、まずは普段ロンドンで観られるものとは一線を画すプログラム構成だ。古い見慣れた名作は影をひそめ、ほとんどが過去2シーズン以内に作られた新作。しかも際立った才能のアーティストが居並ぶとなると、私の側の期待もいやが上にも高まった。だがそのためなのか、かえって完璧の域には達していない部分に目が行ってしまうのは、どうしたことか。だが自分の中に、心からの賞賛と分け知り顔で重箱の隅をつつくような態度が不思議に共存しているのを自覚してしまったからには、みごとな踊りまた踊りに身を浸しつつ、どんな小さな矛盾も見逃すわけにはいかない。

最後のカーテンが下りる頃には、確かにあらゆる感覚が十二分に満たされていた。だがこの公演の幕開きは、どう転ぶかわからない不安と期待を抱かせるものだった。マーク・モリスの『ボー(Beaux)』は今年2月の初演で、俊敏な9人の男性の優雅な動きが溶け合った作品。マルチメディアの『ハーブシコードと小オーケストラのための協奏曲』に乗せて光と影の表現を掘り下げてゆくが、とりわけ光については、宙に浮くような揺らぎの軽さの中にも深遠な重みが巧みに感じられるのが、いかにもモリスらしい。衣裳はピンク、オレンジ、黄緑の迷彩柄のユニタードで、各ダンサーの体型や身長の違い、そしてパーソナリティの一端を見せてはいたが、それ以上のプラスの要素はなかった。第1楽章の間は出演者は明らかに地に足が着いておらず、パートナリングはリフトする側もされる側もごちなく自分を解放できないまま。だが終盤にかかると雰囲気は激変し、音楽そのものの温かな輝きが神経質なぐらつきに取って代わり、心地よさが最終的な味わいとして残った。

短い休憩を挟んで続いたのは、ユーリ・ポーソホフがプロコフィエフの同名の音楽に振り付けた2010年の『古典交響曲』、このバレエ団の力量を、余すところなく見せる作品だ。電光石火のスピードで動くダンサーたちは空中に留まっているかに見える、動きの精度と確実さは我が目を疑うほど。軸を傾けたピルエットや一瞬のジュテが個々の振付フレーズの中でアクセントとなっているが、ときにそれが過剰な印象を与えないでもない。小柄で機敏なマリア・コチェトコヴァと、パートナーでこれもダイナミックな山本帆介がとりわけ印象深く、眼を見張る回転技や立て続けの方向転換、そしてあり得ないほど高度な技を次々と、驚くべき身体コントロール力で高速かつ滑らかにこなしてゆく。当然

のごとく、喝采が湧きおこる。

同じくポーソホフの『RAKU』は昨年2月初演。金閣寺放火事件に着想した物語バレエで、抽象作品が続く中であって好ましいコントラストを生みだしていた。美術はシンプルながら効果的で、プロジェクターに次々と映しだされる映像が巧みに展開を支える。音楽はダブル・ベース奏者のエシマ・シンジへの委託曲で、ときに稲妻のように大音量だが、進行に寄り添って効果を上げていた。振付には能や舞踏を含むさまざまな様式が取り入れられていたが、ネオ・クラシカルと総称できる。作品としての一貫性に欠けると感じられるところもあったのは、おそらく、特定のジャンルの表現様式にこだわって流れが滞る箇所が散見されたためだろう。とはいえ出演者の踊りはすばらしく、特にヤンヤン・タンの天上来るかつ情熱的な造形は優美を極めた。しなやかな全身を支える骨格の存在こそが、この悲劇性を現出したのだ。

最後に上演されたのは、クリストファー・ウィールドンの作品中でも傑作の一つに数えられる『ウィズイン・ザ・ゴールデン・アワー(Within The Golden Hour)』。ダンサーたちは精緻なパターンを描き出し、見事なラインを作り上げたと思うと、次の構図へとたちまちに変化してゆく。エツィオ・ボツとヴィヴァルディの音楽は、創造性豊かなフレーズや、どの瞬間も見事なまでに革新的かつ美的なパド・ドゥを力強く支えていた。6人のソリストはそれぞれに感嘆を誘ったが、この日2つ目の出番となるコチェトコワは、サンフランシスコへの不転の決意での移籍は最良の選択だったのだと確信させるに十分だった。同時に、ロンドンには彼女の豊かな才能を正當に評価できるカンパニーが皆無だったのを、改めて残念に思う。彼女とヴァネッサ・ザホリアン、デミアン・スミス、サラ・ヴァン・パッテン、ピエール=フランソワ・ヴィラノバ、ホアン・ボアダはひたすら力強い振付の流れに身を任せ、それだけで、もっと観たいという強い感情を観る者に掻き立てた。客席の熱狂的な反応という後押しもあり、確かな実力を持ったこのバレエ団の再訪が時をおかず実現することを、願うばかりだ。(訳:長野由紀)